

入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験
「これからも一緒に」

栃木県立宇都宮女子高等学校2年 岩佐雅

5分おきに鳴る電話の呼び出し音。また祖母からの電話か、とため息をついた。

私の祖母は自宅で学習塾を開いたり、地域のサークルでコーラスをしていたりと孫の目から見ても社交的な女性であった。今まで一度もノーマイクで過ごした日はないと本人が言うように、いつもきれいな化粧をしており、80歳を超えているようには見えなかった。私はそんな祖母が誇らしかった。

祖母からの電話が急に増えたのは昨年の春だったろうか。祖母はアルツハイマー型認知症と診断された。日本人の65歳以上の7人に1人が認知症と言われている現在、自分の身近な人が発症してもおかしくないはずだが、当時の私は素直に受け入れられなかった。祖母の少しおかしな行動に嫌悪感を抱いていた。例えば、祖母の息子である父に何度もかかってくる電話。祖母は自分の悩みや不安だけをひたすら訴え続け、父の言葉には一切耳を傾けない。挙げ句の果てには「あんたに言ってもしょうがないわ」と一方的に電話を切る。孫の私の名前はどうに忘れてしまっているようだ。時には父の名前も忘れて、「あんた、誰や？」と聞く。認知症が引き起こす典型的な行動と頭では理解しているが、自分のことを忘れてしまった祖母に親しみを感じるできなくなっていた。

今年の夏、久しぶりに祖母に会いに行った。認知症を発症して以来、勉強が忙しいからなどと理由をつけて祖母を避けていた。見た目からは以前とさほど変化を感じられなかった。優しく「いらっしやい」と迎えてくれた。認知症と診断されたのが信じられないくらいだった。掃除や洗濯、料理も問題なさそうだ。しかしほっとしたのもつかの間、

祖母のひと言に現実引き戻された。

「あんた、誰やった？」

真顔で尋ねる祖母は紛れもなく私の祖母であるのだが、祖母にとつて私は見知らぬ他人に思えるのだろうか。私の心は寂しく、悲しく、つらい水の底に沈んでいった。

認知症は祖母の脳を少しずつむしばんでいる。昨日覚えていたことが今日は思い出せない。正確には脳に記憶として存在していないのだという。本人がどれほど努力しようとも、記憶にないのだから思い出すことも不可能なのだ。祖母にとつて私は存在しないものになってしまったのだろうか。そう考えると、久しぶりに祖母に会いに来たというのに、早く家に帰りたくてしかたがなかった。

その夜、祖母が床についてから私は1冊のノートを見つけた。それは祖母の日記だった。認知症と診断される少し前、祖母の様子がおかしいと家族が感じ始めたころから書き始まっていた。祖母は自分自身で記憶力の衰えに気がついていた。はじめは歳としのせいと気にしていなかった。しかし、日に日に不安は大きくなり、自分の頭がおかしくなってきたと書き記していた。恐怖と不安、その二つに支配された文章で埋め尽くされた日記であったが、時折私の名前が書いてあることに気がついた。「孫の名前は雅（みやび）」、「高校に合格した」「おっとりしているが頑張り屋」「8月で17歳」。私を示す言葉がちりばめられた日記を読みながら、私は涙が止まらなかった。祖母の悲しみ、祖母の優しさ、それらが波のように私の中に流れこんできた。失われていく記憶をつなぎとめようと、毎日思いを書き重ねてきた祖母。その願いはかなわず、多くの記憶が失われてしまったけれど、隣の部屋で眠っているのは確かに私の祖母なのだ。

私が生まれてから17年、限りなく慈しんでくれた祖母。その17年分の記憶は手が届く場所にはないけれど、私の中には確かに存在する。そう気がついた夜だった。おばあちゃん、明日はどんな話をしようか。私は孫の雅だよ。来年の夏には18歳になるんだよ。そんな話をしながら祖母の大好きな冷やし飴（あめ）を飲もうかな。